

集合住宅における幼児・児童のいる世帯向け住戸計画について

—神宮東パークハイツ（住宅・都市整備公団）における事例研究—

新 田 米 子

Planning the Dwelling Units of Apartment Houses for Young Families with Children —A Research on Jingu-higashi Park-heights Housing Project—

Yoneko Nitta

Summary

This paper reports the actual living condition among the young families with children in apartment houses.

The survey with questionnaire was carried out from the end of November to the early December, 1990 at two housing projects in Nagoya. The major findings are as follows.

- 1) About 50 percents mothers feel dissatisfied about dwelling units area, number of rooms, bathroom and kitchen equipments. Also about 60 percents of them feel dissatisfied about capacity of storages.
- 2) Many mothers with children (aged from 0 to 3) are worried about their children happen to meet an accident when they are cooking or ironing.
- 3) The dining with kitchen style is better than the separate type when they cook with their children.

Key words: Apartment house 集合住宅, Planning the dwelling units 住戸計画, Young family with children 子どものいる世帯

1. はじめに

わが国のここ数年来の異常な地価高騰現象は、一般勤労者世帯の一戸建住宅取得の願望を益々困難なものにしてしまったといえる。このように一戸建て住宅を断念せざるを得ない人々にとっては、一戸建住宅のもつ質を少しでも多く取り入れたより質の高い公的集合住宅の供給が望まれるところである。

ところで、80年代から90年代にかけて建設された比較的新しい集合住宅の傾向をみると、それらの外観は、従来の集合住宅にみられがちな四角い箱という画一的イメージは薄くなりデザイン上技巧を凝らしたものが増え、より個性的な建物が多くなったといえよう。さらに内部空間についてみれば、

団地スタイルといわれ長い間定着してきた DK 型間取りが住戸規模の拡大に伴い減少し、LDK 型が圧倒的多数を占めるようになってきたことが大きな変化の一つとしてあげられる。また、台所・浴室設備等の室内装備もデザイン・機能性においてある一定の水準の向上が認められよう。

しかしながら、集合住宅入居者の中で、その多くを占める夫婦と子から成るいわゆる子持ち世帯の住生活に対する不満は少なくなく¹⁾、最低居住水準はどうか満たされつつあるものの、より豊かな住生活を保障しうる誘導居住水準に満たない世帯の割合が他のライフステージ層に比べかなり高いものとなっているのが現状である。²⁾

子持ち世帯の中でもとくに幼児・児童を抱える若い世帯にとってこの集合住宅での生活は、子ども数の減少化傾向の中にあっては、子どもの遊び仲間を得るという点で、また母親同士の交流を活性化させるという点で、さらに共働き層にとっては住居管理の簡便さなどさまざまな利点をもち、都市部におけるこのライフステージ層にはむしろふさわしい居住形態といえなくもない。このような集合住宅のもつ利点にさらに居住性の改善が加われば、より理想的な都市型住居として集合住宅は、定着し得ると考えられる。

本研究は、このような状況をふまえ、育児期および教育期にあたる世帯層の住要求を把握し、現在供給されている集合住宅の住戸計画上の問題点を明らかにしようとするものである。

2. 研究 方 法

(1) 対象団地

対象団地の選定にあたっては、比較的新しい計画理念に基いて建設された住宅団地で、しかも住戸平面タイプによって居住性の比較が可能なよう、できるだけ多様な住戸平面をもつ集合住宅であることを考慮した。そこで今回は、住宅・都市整備公団による住宅「神宮東パークハイツ」(名古屋市)を主たる対象団地とした。しかしこの団地では DK 型住戸平面の戸数が少ないため、同公団による「桜田団地」をも加えて対象とした。両団地の概要は表 1 に示す通りである。

両団地とも名古屋市の中心部に近い熱田区に位置し、通勤・通学・買物等の利便性は高い地域である。

表 1 対象団地概要

	神宮東パークハイツ	桜田団地
供給主体	住宅・都市整備公団	左に同じ
所在地	名古屋市熱田区	左に同じ
建設完成年	S. 54~61年	S. 54~55年
総戸数	1115戸	478戸
住棟形式	中層階段室型(13棟) 高層スキップフロア型(11) 高層片廊下型(3) 高層塔状型(2)	中層階段室型(3棟) 高層片廊下型(8)
供給方式	賃貸住宅(22棟) 分譲住宅(7)	賃貸住宅のみ
住戸型式	1DK, 1LDK, 3DK 3LDK, 4LDK, 5LDK	2DK, 3DK

とくに「神宮」は特定住宅市街地総合整備促進事業として計画されたもので、①職住近接、②安全な避難地、避難路確保による都市防災性向上、③生活環境基盤整備による居住環境の改善等を都市の再開発によって解決しようという意図のもとで計画された団地である。この団地には約8.7haの地区公園が隣接し、都市とはいえ緑・オープンスペースに恵まれた

環境をもつことが特色といえる。一方「桜田」は、DK型住戸平面から成る従来型の典型的な中、高層市街地住宅といえる。

(2) 調査方法

幼児・児童のいる世帯（約370世帯）の主婦を対象とし、調査票直接配布による留置自記法とするアンケート調査を1990年11月30日より同年12月3日にかけて実施した。配布、回収状況は表2の通りである。

表2 調査票の配布・回収状況

団地	配布数	有効回収数	回収率(%)
神宮東パークハイツ	185	155	83.8
桜田	20	13	65.0
計	205	168	82.0

今回対象とした幼児・児童のいる世帯は「神宮」の場合全世帯の4割弱となっている。

3. 結果及び考察

(1) 調査対象の属性

対象世帯の属性は、表3に示すように、社会的階層としては、ホワイトカラー層（専門・技術職、事務職、管理職）が多く7割を占めている。妻の就業率は、「フルタイム」が約2割、「内職・パート」が1割程度で無職が多い（64.9%）。

(2) 住宅の住み心地

現住宅の住み心地について尋ねたところ、「建物全体の外観」や「通風」、「便所の設備」については満足感が高く（「満足」+「まあ満足」の比率）、総合評価の満足感も高い割合となっている（図1）。総合評価の満足感が高いのは、住環境に対する評価は尋ねていないが、おそらく立地条件の良さやオープンスペースに対する充足感が反映されたものと考えられる。住宅の内部空間については、「収納スペース」の不満（「多少不満」+「非常に不満」の比率）が57.1%と最も高い。ついで「部屋数」（50.0%）、「台所設備」（49.4%）、「浴室・洗面所の設備」（47.0%）、「住宅の広さ」（44.7%）、「間取り」（41.7%）の順で不満感が高くなっている。

子どものいる世帯では、子どもの玩具や遊具等こまごましたものが多く、とくに集合住宅では、外遊び用遊具等の収納が不足しており、それらの収納が玄関回りに設置されることが望まれる。

表3 対象世帯の属性

家族構成	核家族長子就学前	56 (33.3%)
	核家族長子小学生	88 (52.4)
	核家族長子中学生以上	18 (10.7)
	直系家族長子就学前	1 (0.6)
	直系家族長子小学生	3 (1.8)
	欠損家族	1 (0.6)
	その他	1 (0.6)
子ども数	1人	29 (17.3)
	2人	98 (58.3)
	3人	35 (20.8)
	4人以上	6 (3.6)
世帯主の年齢	20歳代	2 (1.2)
	30歳代	95 (56.5)
	40歳代	60 (35.7)
	50歳代	2 (1.2)
	不明	9 (5.4)
世帯主の職業	管理職	38 (22.6)
	事務職	29 (17.3)
	販売・サービス職	21 (12.5)
	技能・労務職	7 (4.2)
	専門・技術職	51 (30.4)
	個人業主	10 (6.0)
	無職	1 (0.6)
	その他	2 (1.2)
不明	9 (5.4)	

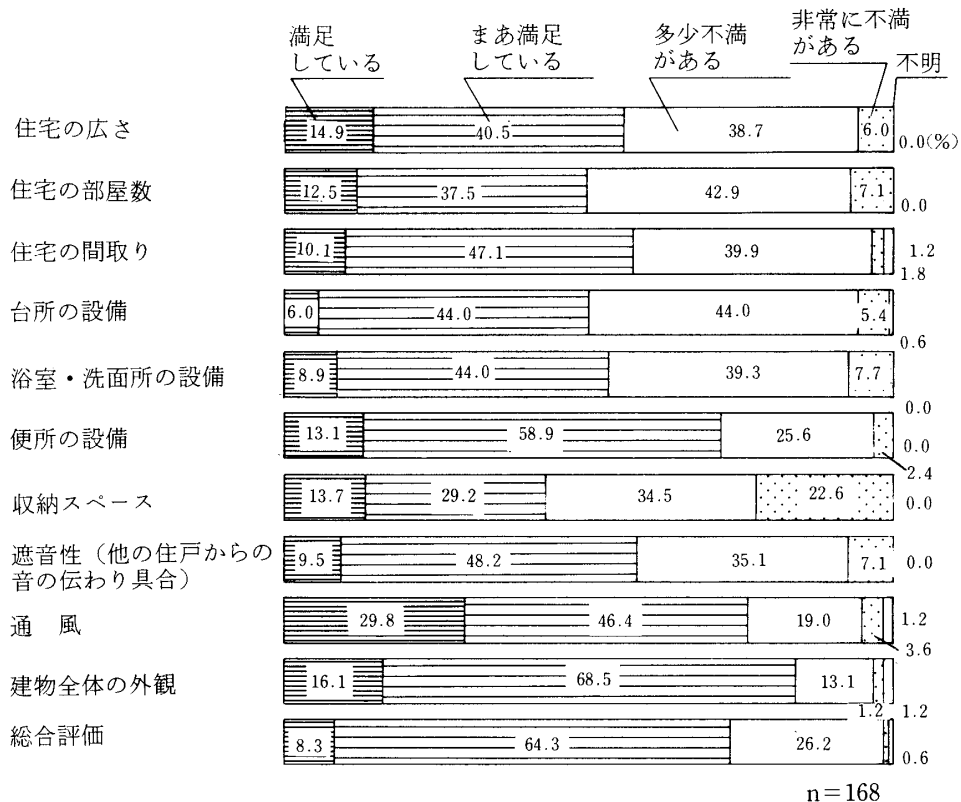


図1 住宅の住み心地

(3) 各室の使われ方

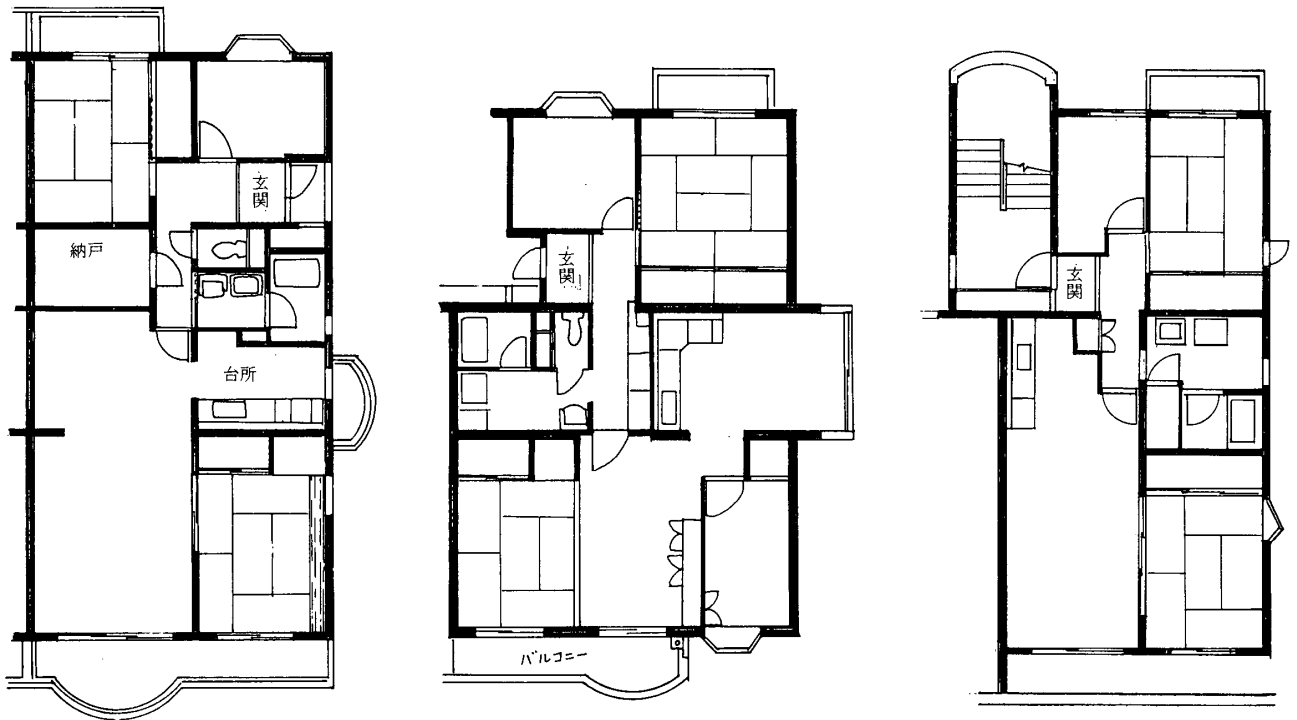
「神宮」の住戸平面は種類が多いが LDK 型が中心となっている。これに対し「桜田」はすべてが DK 型となっている。両団地の住戸平面の代表的なものを図2・3に示す。

各室の使われ方については、図4に示す左欄の13の生活行為ごとに、それらのために主として使用している部屋を一つあげさせ、就寝については、家族全員の就寝の場を平面図上に記させ図5のような結果が得られた。

「食事」「団らん」および「親しい客の接待」等は当然のことながら、リビング・ダイニングやリビング・キッチンでなされることが多いが、「大人の読み書き」「幼児の遊び」「家事」等にも使用されることが多い。つまりリビング・キッチンは、主婦の日中の生活の中心の場となっており、多機能性が要求される空間があるといえる。とくに幼児のいる家庭では、母親の家事作業と幼児の遊びとの調整が困難な課題の一つとなっていて、住空間上の解決が期待されている。

子どもの勉強は小・中学生とも北側居室で行われることが多いが（6～7割）、小学生では、居間あるいは南側居室を利用する世帯も少なくない（25.6%）。年長の子どもは、落ち着きや静寂さを必要とするため居間から離れた北側に、年少の子どもは日当たりや母親の目の届く所という点が考慮され南側とするケースが多くなるといえよう。

次に家族各々がどの部屋を寝室としているのかをみしてみる。最も多いパターンは、「南側居室に家族全員」という形態である（42.6%）。子どもが幼少の頃は、和室で親子揃ってというのがわが国の伝統的就寝スタイルといえるが、ベッド志向が高まっている現代の若い世帯でもかなりこの形態が取られ



K 独立型

DK 型

LDK 型

図2 〈神宮〉住戸平面



図3 〈桜田〉3DK型住戸平面

部屋の種別 生活行為	① 北側居室 a	② 北側居室 b ※ ₁	③ LDK.LD DK	④ 南側居室	⑤ 中居室 ※ ₂
食事 n=167	0.0	0.0	99.4	0.6	0.0(%)
団らん n=167	2.7	3.0	90.4	4.2	0.0
親しい客の接待 n=166	1.8	4.2	88.0	6.0	0.0
改まった客の接待 n=162	3.7	11.1	66.7	18.5	0.0
小学生の勉強 n=109	43.1	20.2	12.8	12.8	11.0
中学生の勉強 n=18	50.0	27.8	0.0	11.1	11.1
幼児の遊び n=118	11.0	9.3	63.6	13.6	2.5
児童の遊び n=97	23.7	23.7	39.2	10.3	3.1
大人の読み書き n=163	16.6	8.6	66.9	5.5	2.5
洗濯物をたたむ n=167	4.2	4.8	40.1	50.3	0.6
アイロンがけ n=163	5.5	9.8	52.1	31.9	0.6
縫い物 n=164	11.0	7.9	62.2	17.7	1.2
泊り客 n=138	10.9	51.4	1.4	35.5	0.7

不明・非該当は除く。

0~20 21~40 41~60 61~80 81~100%

※₁ 一部中居室を含む
※₂ 4LDK住戸のみに該当する。
南北居室には含まれた部屋
と一部南側居室を含む。

図4 部屋の使われ方

ているのは、寝室の広さによるものであろう。また、母親と子、夫（あるいは夫と子）という組み合わせで南と北にそれぞれ分かれて夫婦別就寝としている家族が少なくない(13.5%)。これは、夜泣きする子をあやしたり、夜中の授乳を必要とする世帯では、夫の睡眠の妨げとならないよう、また、生活時間の異なる母子と夫が同一就寝することによって、それぞれの生活リズムに支障をきたすことを避けようとするための手段であり、この状況は子が成長した段階では変わる可能性は大きいと考えられる。

子どもが小学生以上になると、北側に寝室をと

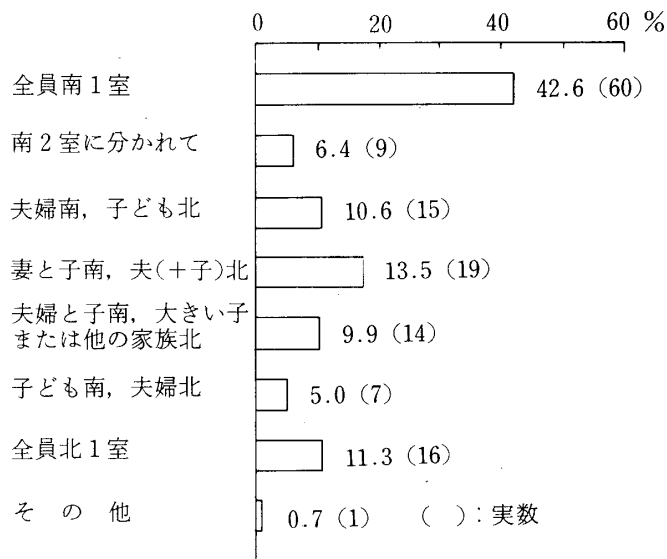


図5 家族の寝室のとり方 n=141

ることが多くなり、勉強・遊びなどの行為もしだいに公的空間から離れた場所に子どもエリアとして確保される傾向が見られる。

(4) 家事作業時の子どもの事故・ケガの心配

家事作業をするときに幼児がそばにいると危険なことが多く、やりにくいものであるが、炊事作業時の子どもの事故・ケガの心配について、「気になる」と答えた母親は、0-1歳児で74%、2歳児で63%を占め、3歳児になるとやや下がり37%となってい

る。

家事の中でもアイロンがけ作業や炊事作業時はとくに子どもがそばにいとやりにくいと思われるが、前者については就学前の子ども各年齢いずれも半数以上が事故・ケガの心配をしていることがわかる（図6，7）。0から2歳位までの子どものいる家庭では、「子どもが寝ている間にそれらを済ませる」という方法で対処しているが、作業をしている部屋に子どもを入れないようにするといった空間上の対処を行っている家庭はほとんどみられなかった。台所周辺にアイロンがけ、縫いものなどができるような、ちょっとした家事コーナーがあって、そのコーナーと子どもの遊ぶコーナーとの間に棚等で仕切ることのできるような工夫がなされれば、さらに安心して家事ができるようになるものと思われる。

(5) 生活騒音について

子どものいる世帯では、自住戸の階下あるいは両隣へ伝わる音に対して大変神経を使って生活していることが多いものである。「子どもの出す音に対してよそから苦情を受けたことがあるか」という問に対し「ある」と答えた人は1割と少ない（図8）。しかし「よその家からの音について」は「気になる」と答えた人が半数にも上る（図9）。回答者の中には下の階の住人によく注意され、そのことが理由で引っ越しを考えているという例もあり（自由回答より）、音の問題は深刻であるといえる。近年、吸音性のすぐれた床材料が開発されてきているので、それらを用いた床仕上げとするなど、建物の構造上の解決方法が考慮されることが期待される。

(6) 子どもの家事手伝いと L,D,K の構成

子どもの発達段階に応じた家事手伝いは、子どもの自立や創造性を育むだけでなく、家族関係の円滑化や生活文化の伝承にいたるまで非常に重要な意義をもっている。

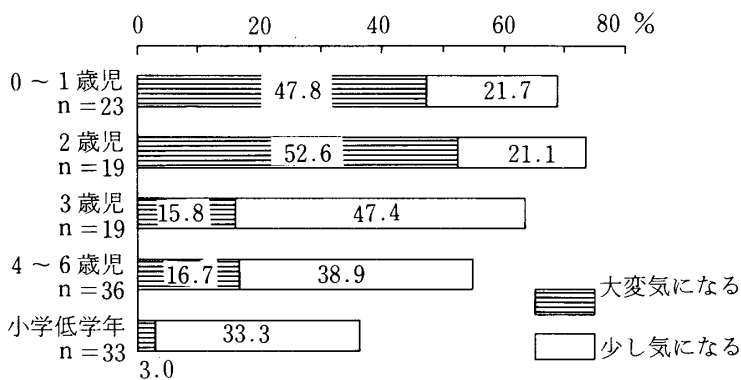


図6 アイロンがけ作業時の事故・ケガの心配

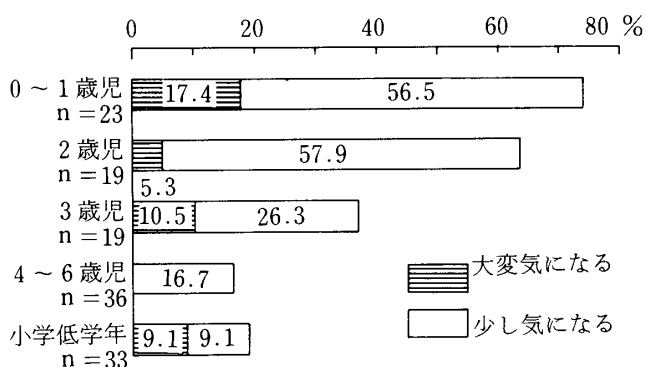


図7 炊事作業時の子どもの事故・ケガの心配

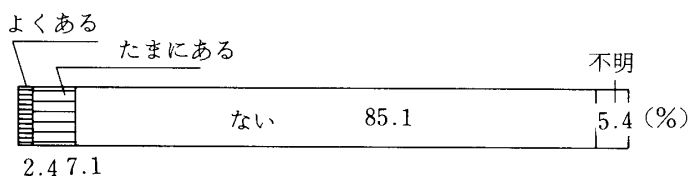


図8 音に関するよそからの注意の有無 n=168

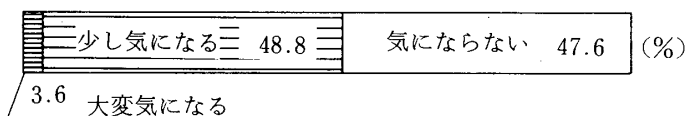


図9 よその家の出す音について n=168

表4 家事手伝い程度(小学生)

	よくやる ほう	まあやる ほう	たまにやる こともある	ほとんどや らない	計
全 体	6 (5.6)	39 (36.1)	53 (49.1)	10 (9.3)	108 (100.1%)
	45 (41.7)				
学年別					
低 学 年	4 (7.7)	17 (32.7)	27 (51.9)	4 (7.7)	52 (100.0)
	21 (40.4)				
高 学 年	1 (2.3)	20 (46.5)	20 (46.5)	2 (4.7)	43 (100.0)
	21 (48.8)				
性 別					
女 児	2 (4.0)	24 (48.0)	23 (46.0)	1 (2.0)	50 (100.0)
	26 (52.0)				
男 児	4 (8.2)	13 (26.5)	26 (53.1)	6 (12.2)	49 (100.0)
	17 (34.7)				

不明は除く。

表5 台所仕事の手伝い程度(小学生)

	よくやる + ときどきやる	たまにやる こともある	いっしょに やったことは ない	計
学年別				
低 学 年	25 (49.0)	22 (43.1)	4 (7.8)	51 (99.9%)
高 学 年	15 (34.1)	29 (65.9)	0 (0.0)	44 (100.0) *
性 別				
女 児	27 (49.1)	27 (49.1)	1 (1.8)	55 (100.0)
男 児	23 (39.7)	32 (55.2)	3 (5.2)	58 (100.1)
L,D,Kの構成別				
キッチン独立型(K)	31 (43.7)	37 (52.1)	3 (4.2)	71 (100.0)
ダイニング・キッチン型(DK)	12 (52.2)	11 (47.8)	0 (0.0)	23 (100.0)
リビング・キッチン型(LDK)	7 (36.8)	11 (57.9)	1 (5.3)	19 (100.0)

不明は除く。 * ($\chi^2=6.935$, $P<0.05$)

る。しかし、現代の家庭生活においては家事全般にわたって省力化が進み、また子どもの自由時間の減少などにより手伝いをする子どもが減っているのが事実である。³⁾

対象世帯の小学生全体の家事手伝い程度は、「よくやる」あるいは「まあやるほう」という子どもの割合は4割程度である。学年別では差はみられないが、性別では女兒の方がその比率が若干上回る傾向がみられるが有意な差は認められない(表4)。

家事手伝いの内容としては、「買い物」「掃除、整理、整頓」「下の子の世話」などは比較的良好に行われているが、中でも食事づくりに関する台所仕事は子どもがとくに興味を引く身近な作業と思われるので、台所仕事の手伝い程度、作業時の問題点等については別に質問を加えた。その結果、台所仕事の手伝い程度では、家事全般の手伝い程度と同様性別による有意差はみられないが、学年別では差が認められた。すなわち、低学年児の方が「やる」+「ときどきやる」という値が高学年児に比べ有意に高いといえる(表5)。高学年児の方が低学年児に比べ家事技術的なものは優れていると思われるが、高学年ほど勉強、塾通い等で忙しくなり、手伝う機会は減少するためといえよう。

また子どもの台所仕事への参加は、台所の位置、広さ、設備の状況などによる影響も考えられるので、L,D,Kの構成別に手伝い程度を比較してみた(表5)。対象住戸の間取りから、K独立型、DK型、LDK型の3つの構成型に分けそれぞれの間で差が認められるか否かを検討した。3者間で有意な差は認められないが、DK型が他の型に比べ若干手伝い程度の比率が上回る傾向がみられる。

次に、子どもと一緒に作業するときの台所の使い勝手についてみると、「やりにくい」(「少しやりにくい」+「やりにくいことが多い」)と答えた人は76.8%と高率を示している。これを台所の形態別で比較すると、K独立型とDK型で、LDK型とDK型の間でそれぞれDK型において「問題ない」とする答えが有意に高いことがわかった(表6)。

表6 複数で作業するときの台所の使いやすさ

	とくに問題はない	少しやりにくい	やりにくいことが多い	計
全 体	26 (23.2)	66 (58.9)	20 (17.9)	112 (100.0%)
L,D,Kの構成別				
K独立型	11 (15.7)	44 (62.9)	15 (21.4)	70 (100.0)
DK型	13 (56.5)	8 (34.8)	2 (8.7)	23 (100.0)
LDK型	2 (10.5)	14 (73.7)	3 (15.8)	19 (100.0)

不明は除く。 ** (K:DK $\chi^2=15.349$, $P<0.01$)
(DK:LDK $\chi^2=9.899$, $P<0.01$)

複数作業がしにくい理由については(図8)、「作業台が子どもには高すぎる」(55.4%)というのは当然といえるが、「台所が狭い」(47.8%)「調理作業台が狭い」(52.2%)なども多く、とくにK独立型は、家族の家事参加という点で問題が多いといえよう。

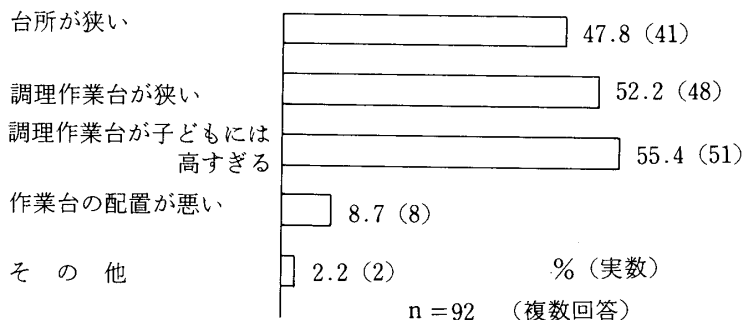


図8 調理作業がしにくい原因

DK型の場合、調理作業台の狭さを

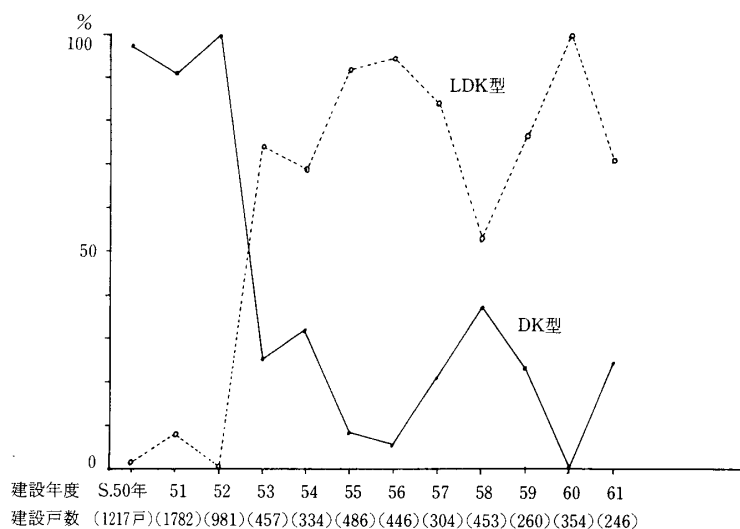


図9 住宅・都市整備公団〈中部支社〉
市街地系住宅の年度別建設戸数
——住宅型式別比率——

食卓でカバーできるという利点や家事作業効率という点でも従来から評価されてきたタイプではあるが、最近の間取りの傾向としては民間住宅はもとより公団住宅においても LDK 型が主流を占めるようになり(図9)、家族のライフステージに適合する住戸平面という観点から、今後の住戸平面計画においては、再度検討が必要とされているといえよう。

4. 要 約

本研究は、都市部の一般勤労者世帯が育児期・教育期に過ごす割合が高い集合住宅の居住性について検討を試み、この時期の世帯層の住要求を明らか

かにしようとしたものである。

名古屋市内に建設された住宅・都市整備公団による2つの団地における事例調査の結果次のような点が明らかとなった。

1) 住宅の住み心地では、「収納スペース」「部屋数」「住宅の広さ」「間取り」「台所設備」「浴室・便所の設備」等について不満を訴える割合が高くなっている。しかし、住宅の総合評価という点では、立地や子どもの遊び環境の良さが反映されてか満足感が高くなっている。

2) 各室の使われ方をみると、多くの生活行為が南面する居室で行われる傾向が強い。北側居室は夏季以外は居住性が悪くなりがちのため、これらを有効に使用するには断熱性能をさらに高める必要がある。

3) 幼児の居る世帯では、母親の炊事やアイロンがけなどの家事作業時に子どもが事故やケガなどに合うのではと心配している母親が多い。対象住宅でも他の集合住宅においてもこれらに対する空間上の配慮が現代のところほとんどみられず、今後は台所を中心とした“家事コーナー”の計画において、幼児への安全性の配慮がなされることが望まれる。

4) 生活騒音については、日頃から隣接する住宅との人間関係をうまくすることにより大きなトラブルにならないよう努力している傾向がうかがえる。しかし居住者の中には、それがうまくいかず悩みが深刻化している例も若干みられた。音の問題に対して、床材の改良等建築計画上の課題は大きいといえる。

5) 子どもの家事手伝いのなかで、台所仕事の手伝いは低学年を中心に比較的よくなされている。母親が子どもと一緒に作業をする時に、現在の台所では広さ、設備の点で問題がみられる。DK型は、

K独立型やLDK型に比べ複数作業するには向いていて、小学生位の子どもがいる世帯にはよりふさわしいタイプといえよう。

しかし、これらL,D,Kの構成は家族のライフスタイルとも関わりが深いと考えられるので、ライフステージとライフサイクルの双方からの検討が今後の研究課題として残されているといえる。

なお、本研究は本学の平成2年度研究助成を受けて行ったものであることを記し、感謝の意を表します。

注

- 1) 「昭和63年度住宅需要実態調査の結果」『住宅需要の動向』(建設省住宅局監修)によれば、住宅に対する評価を家族型別でみると、「親と子(長子6~11歳)」の層で不満率(「多少不満」+「非常に不満」の割合)が最も高く62.5%、「親と子(長子5歳以下)」の同比が60.4%と他の家族型層に比べ高い値を示している。また、住宅及び住環境に対する評価でも同様の傾向がみられる。
- 2) 「昭和63年住宅統計調査」『日本の住宅』(総務庁統計局)によれば、都市居住型住宅で誘導水準に満たない世帯は、「夫婦と6歳未満の者」世帯で73.4%、「夫婦と6~17歳の者」世帯で68.4%と他の世帯層に比べ高率を占めていることがわかる。
- 3) NHK世論調査部の報告(「小学生の生活と意識」1990)によれば、小学生が「いつもしている」家事手伝いは「ふとんのあげおろし、ベッドをととのえる」(24.2%)、「食事のあとかたづけ」(22.0%)、「ゴミを出す」(15.6%)、「食事のしたく」(10.8%)などとなっている。(『日本子ども資料年鑑』日本総合愛育研究所編、中央出版、1991、P.363)

参考文献

住宅・都市整備公団中部支社住宅業務部「神宮東パークハイツの計画・設計記録」昭和61年
The City Planning Department, Vancouver, British Columbia, Canada HOUSING FAMILIES AT HIGH DENSITIES (1978) (湯川利和・延藤安弘共訳「居心地のよい集合住宅」1988、鹿島出版会)
太田さち他「キッチンとのかかわりからみた団らん空間のあり方に関する調査研究(第1報)」,「同(第2報)」1990年、日本家政学会誌 Vol.41 No.9, PP.875~886